

10分という時間が意味するもの

- 子どもの遊びの周期性と同調性について -

北九州市立大学文学部人間関係学科

黒田 清香

要旨

子ども達と一緒に遊んでいると、その遊び方には一定のリズムがあるのではないかと感じる。そこでS施設でおこなわれているサーキット遊びのはしご遊びとすべり台遊びを対象に調査をおこなった。はしご遊びとすべり台遊びそれぞれで、子ども達が来る回数には10分ごとの波が出来る。子ども達は遊具で遊んでいるが、ある程度遊ぶと満足し、飽きてしまい、子ども達はそれぞれで遊び始める。ここに至るまでの時間が10分という時間なのである。その後、谷の時に数人の子ども達が遊具に来て遊んでいるために、再び山が起こつて谷が来るということが繰り返されていると考えられる。この波は人がそれぞれ持っているリズムなのではないだろうか。S施設の子供達は他者との結びつきが弱い。そのためにこのサーキット遊びにも個人個人の本来持っているリズムが表れていると考えられる。そしてだからこそ、S施設の子供達は社会関係に捕われない自由な存在であるといえるのではないだろうか。

目次

はじめに	4-1-1 仮説1：飽きる
第1章 S施設の概要	4-1-2 仮説2：先生の呼びかけのむら
1-1 S施設について	4-1-3 仮説3：子どもの体力の持続
1-2 S施設の子供について	4-1-4 仮説4：個人行動と大人との接触で起こる波
第2章 サーキット遊び	4-2 同調性による仮説
2-1 サーキット遊びについて	4-2-1 仮説5：最初に遊ぶ子どものリズム
2-2 遊具別の遊び方	4-2-2 仮説6：回数が多い子どものリズム
2-3 子どもの遊び方の個別観察	4-2-3 仮説7：マイペースな子どもの遊びのリズム
第3章 サーキット遊びのデータ分析	4-2-4 仮説8：続けて遊ぶ子どものリズム
3-1 分析方法	4-2-5 仮説9：2~3人のグループのリズム
3-2 分析結果	4-2-6 仮説10：他者と関わりを持ちたがらない
3-3 はしご遊びのデータ分析	第5章 考察
3-4 すべり台遊びのデータ分析	参考文献
第4章 分析結果による仮説とその検証	グラフ一覧
4-1 周期性による仮説	

はじめに

子どもと遊んでいると、大人と子どもでは遊びのリズムが異なると感じることが多い。子どもは次々と遊びを変えたり、一つの遊びに長く集中したりする。子どもの遊びのパターンについて知ること、こうした子どもの心を垣間見られるのではないかと考え、ある知的障害児通園施設でおこなわれている遊びに注目した。

私が調査した施設を本論文中では S 施設としている。S 施設でおこなわれている遊びの一つにサーキット遊びがある。サーキット遊びで子ども達の安全管理と補助をおこなっていると、遊び場がしんとしている瞬間があり、その時子ども達が遊具で遊んでいないことに気がついた。しばらくするとまた何事もなかったかのように子ども達が遊具に集まってきている。どうしてこのようなことは起こるのだろうか。

調査は 2002 年 5 月 1 日(水)・5 月 7 日(火)・5 月 9 日(木)・5 月 14 日(火)・5 月 16 日(木)・5 月 20 日(月)・5 月 24 日(金)・5 月 29 日(水)・5 月 31 日(金)・6 月 3 日(月)・6 月 6 日(火)・6 月 11 日(火)・6 月 14 日(金)・6 月 19 日(水)・6 月 21 日(金)・6 月 24 日(月)・6 月 27 日(木)の合計 17 回のサーキット遊びを対象におこなった。分析方法は実際に私がボランティアとしてサーキット遊びに加わりながら観察をすることと同時に遊びの様子をビデオに撮って記録した 2 つのデータをもとに行なった。そして、毎回のサーキット遊びですべり台とはしごに来て遊んだ子ども別のべり台を 1 分毎にグラフにまとめた(グラフ 1、2)。これらがはしごとすべり台に子どもが来た数を合計したグラフである。グラフ 1、2 より、単に印象だけでなく、回数の波が出来ていることが分かる。特にはしご遊びでは、毎回約 10 分ごとにはっきりと同調が出来る。本論文ではなぜこのような同調性が出来るかということについて仮説を立て、そ

れぞれの仮説について検証していく。

第 1 章 S 施設の概要

1 - 1 S 施設について

S 施設は 2 歳から 6 歳の子どもが通う知的障害児通園施設である。子どもたちは月曜から金曜の 10 時に登園し、14 時 30 分に退園する。学園で過ごす一日の流れは概ね表 1 にある通りである。(今回の調査は表 1 中の《 1 》と《 2 》の全体活動での遊びが対象となっている。

子どもの在園数は 5 月 2 日までが 16 名、5 月 7 日から 5 月 31 日は 18 名、6 月 1 日からが 17 名となっている。これは途中入・卒園の子どもがいるためである。また、欠席する子どもも数名いるため、調査期間中の子どもの登園最大人数は 5 月 16 日で 18 名、最少人数は 5 月 1 日で 12 名と日によってばらつきがあり、平均すると 13.4 名である。男女構成は 5 月 2 日までが男子 11 名・女子 5 名、5 月 7 日から 5 月 31 日までが男子 13 名・女子 5 名、6 月 1 日から男子 13 名・女子 4 名である。年齢構成は 5 月 2 日までが 3 歳 3 名・4 歳 5 名・5 歳 8 名である。5 月 7 日から 5 月 31 日までの期間に入園のため 4 歳児が 2 名増え 7 名となり、6 月 1 日からは退園のため 5 歳児が一人減り 7 名となった(年齢は 2002 年 4 月 1 日現在のものとした)。

学園での活動は主に 3 つに分けられる。クラス活動は発達状況、年齢を混合にして 3 クラスに編成されている。1 クラスの人数は 5~6 名である。グループ活動は発達状況に応じて 4 グループに編成されている。このグループは発達状況に応じて編成されるため、グループによってその人数はまちまちである。全体活動は全員参加の活動である。クラス活動では排泄・食事・衣服の着脱といった身辺自立について取り組み、グループ活動・全体活動では皆で遊びながらそれぞれの発達課題について取り組んでいく。一日のうち、全体活動とグ

ループ活動は午前と午後にそれぞれ1回ずつあるが、全体活動ではS施設の子どもが全員一緒に午前と午後で違う遊びをし、グループ活動では午前と午後でそれぞれ別の一つのグループが他の部屋へ十数分間行き、全体活動の遊びと全く別の遊びをする。全体活動とグループ活動は並行しておこなわれる。しかし、グループ活動はおこなわれない場合もある。全体活動での遊びの内容は、その時の子どもの発達課題や発達状況に応じて前月に先生の話し合いで決められる。この前月に決められた全体活動は暫定的なもので、天候、登園人数、子どもの体調などその日の状態によって週の中で入れ替えがなされる場合も多い。また、S施設の子ども達は言語発達の面でも遅れが見られるケースが多いので、S施設で遊んでいる時も言葉によるコミュニケーションは成立しにくい。そのため、主に言語面の力を伸ばすための個別指導もおこなわれており、全ての子どもが少なくとも週1回の割合で受けている。その他、年間行事として遠足、プール、運動会、クリスマス会などが開かれている。

私は1998年から現在に至るまでの4年4ヶ月間ボランティアとしてS施設に通っている。S施設で活動がおこなわれている月曜から金曜のどの曜日でも活動に参加出来るようになっているので、私がS施設の活動に参和している回数は、多い時で週4回・最低でも週1回である。ボランティアの、普段の活動は、遊具の出し入れ・遊びの安全管理・子どもの着脱の手伝いなどが主である。もちろん、一般的に見て子どもがしてはいけないことをしていればボランティアでも注意する。しかし、極力子どもには介入せずけんかをしていてもけがをするようであれば止めない。行事では、子どもの付き添い・うんどう会・クリスマス会などの手伝い・会場準備・子どもの演技補助などを行っている。

この論文では、学園でおこなわれている全体活

動のサーキット遊びに注目したが、全体活動で他におこなわれている遊びは、外遊び・紙吹雪遊び・ダンボール遊び・コーナーを設けてままごととブロック遊び・シュレッダー遊び・小麦粘土遊びなど様々なものが挙げられる。調査期間中の全体活動での遊びは、サーキット遊びを始めとし、外遊び・エアポリン・ダンボール遊び・新聞紙遊び・感覚運動遊びが主におこなわれていた。調査期間中の全体活動を1週間ごとに見ると、サーキット遊びは1週に約2回、先述した他の主な遊びは約週1回おこなわれていた。毎週全く同じ遊びというわけではなく、主におこなわれている遊びの中でもそれぞれ工夫されていたり、他の遊びも取り入れられることもある。

1-2 S施設の子どもについて

S施設の子ども18人をそれぞれA・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R、先生はa・b・c・d・e・f・gと表記した。子どもの特徴・S施設での社会関係を簡単に知るために、以下の(1)～(5)に分けてみた。

(1) 年齢と性別

男子はF・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・Rである。女子はA・B・C・D・Eである。年齢を3歳から4歳までと5歳以上に分けると、3～4歳はB・D・E・F・G・H・I・O・P・Q・Rで5歳以上はA・C・J・K・L・M・Nである。

(2) 子ども同士

A・C・D・E・F・G・H・J・Mは比較的一人で遊ぶことが多く、K・L・O・Pは2～3人で遊ぶことが多い。B・Q・Nは2～3人で遊んでいる子ども達に後からついていたりその真似をしたりすることが多い。

(3) 活発性

遊んでいて動き回るのはA・C・J・Lである。反対にあまり動き回らないのはG・Rである。

(4) 先生やボランティアとの関係

先生としか関わりを持たないのはD・G・H・Rである。先生ともボランティアとも積極的に関わろうとするのはB・K・L・N・O・P・Qである。

(5) その他

NはEのことが好きだがEはNから距離を取りたがっている。従ってNがEに近づくとEはNから離れたところへ行く。MとGはお互いに敬遠しあっている。

(2)と(4)より、S施設の子も達の女子は単独行動をとりやすく男子は人と関わりたがる傾向が見られる。また、(2)よりS施設の子も達は2~3人の集団で遊ぶ子どもよりも一人で遊ぶ子どもが多い。よく2~3人で遊ぶ子ども達も一人で遊んだり毎回メンバーが違ったりする。この年齢の子もはもともと子ども同士の結びつきが弱い。しかし、毎回メンバーは異なっても2~3人で遊ぶ子どもがいるということは、曖昧なものとはいえ集団が形成されつつあるといえる。さらに(4)と(5)より、子ども同士で嫌い合ったり仲良くなったり、先生やボランティアに関わろうとしたりするため、子ども達が他者に対する社会的な意識を持っていると思われる。

第2章 サーキット遊び

2-1 サーキット遊びについて

サーキット遊びとは巧技台、はしご、すべり台、一本橋などを組み合わせ、それを使って遊ぶことである。言ってみれば室内簡易アスレチックといったところだろうか。サーキット遊びの目的は、粗大運動をおこなうことで子どもの運動機能を高めることである。毎回、サーキットの組み合わせ方は異なる。この遊びではどこから始めてどこで終わっても自由である。先生とボランティアは、それぞれはしごや巧技台の高くなっているところなど危険と思われる箇所、大人の手が要りそうな箇所に一人か二人ずつ付き、子ども達の安全管理

と補助を主におこなう。1回でおこなわれるサーキット遊びはだいたい20~40分間である。

サーキット遊びはその遊びの時間内で繰り返して同じように遊ぶために、遊び方が一定になりやすい。サーキット遊びで使われる遊具は毎回同じものを使うわけではないが、既に子ども達にとって何回も遊んだことがある遊具である。子ども達にとって、サーキット遊びで使われる遊具への新鮮さは薄らいでいるといえるかもしれないが、それゆえに子どものより新しいもの、より刺激の強いものへ集まるという性質に惑わされることなく一人一人の子もまたは集団の子も本来の遊び方の傾向が見えてくるのではないかと考える。

2-2 遊具別の遊び方

子ども達はサーキット遊びの遊具で実際にどのように遊んでいるのだろうか。ここでは、それぞれの遊具ごとに子ども達の主な遊び方を挙げていく。

(1) はしご・アーチ型はしご

- ・一人で、または大人の手を借りて歩いて渡る。
- ・四つんばいで渡る。
- ・一段上り、段と段の間に入ってまた一段上って進む。

・はしごの下からもぐり込む。(*)

・はしごの上から下へもぐり込む。(*)

・はしごの下からぶら下がる。(*)

(2) すべり台 (注:サーキット遊びで使われているすべり台はすべりの悪いすべり台である)

・かけ下りる

・かけ上る

・歩いて下りる

・歩いて上る

・すべり台の下にもぐり込む。(*)

・はらばいで頭からすべる。

・はらばいで足からすべる。

- ・あおむけで頭からすべる。
- ・あおむけで足からすべる。
- ・四つんばいで下りる。
- ・四つんばいで上る。

(3) 平均台

- ・平均台の上を歩く。
- ・平均台にまたがって進む。
- ・はらばいで進む。

(4) 一本橋

- ・小人でまたは大人の手を借りて歩いて渡る。
- ・ - 本橋にまたがって進む。(＊)
- ・ぶら下がる。(＊)
- ・一本橋の下に寝そべる。(＊)

(5) 巧技台

- ・巧技台の上を歩く。
- ・巧技台の上から飛び下りる。
- ・巧技台をまたいで超える。
- ・巧技台の上に寝そべる。

(6) マット (注：これは安全管理を図るために敷かれたものである。)

- ・寝そべる。
- ・(巧技台から) 飛び下りる。
- ・飛び跳ねる。
- ・マットの下に入る。(＊)

もぐり込んだりぶら下がったりと遊んでいて危険性が高いと思われる場合 (この場合を上文では(＊)と注記した)は、先生やボランティアにすぐ止められる。

2 - 3 子どもの遊び方の個別観察

サーキット遊びでどのように子どもが遊んでいるか具体的に知るために一人ずつの子どもの遊び方をそれぞれ取り上げていく。

Aさん：Aはサーキット遊びが始まると、隣の部屋から真っ先に来ることが多い。はしごかすべり台に行き、一度遊ぶと遊具から下りて別の遊具へ

移動する。マットの上で飛び跳ねたり寝そべったりしていることが多く、そうしている間に時々遊具へ向かう。動きが変則的で、サーキット遊びでの全体の流れと反対向きに進むことも多い。サーキット遊びでAがよく向かう遊具ははしごとすべり台である。高いはしご・低いはしご2つある時は両方向かう。Aははしごを一人で素早く渡ることが出来る。すべり台はかけ上がることが多い。いつも一人で遊んでいるが、「Aちゃん」と声をかけると振り向いて笑う。また高い所が好きで、サーキット遊びをしている間もしばしばピアノやロッカーに上がる。先生やボランティアはそれを見つけるとすぐに注意し、Aを下ろす。Aがピアノに上がっていたのでボランティアが注意して下ろすと、下ろした人の表情や動作を見ながら再びピアノに上がろうとすることが多い。これらの様子から、Aは注意されることで人と関わろうとしているとも考えられるのではないだろうか。また、空いているロッカーに入っていたり、ピアノに映った自分の顔を見ていることも多い。

Bさん：はしご・一本橋・すべり台・平均台と一通り続けて遊ぶ。はしごや一本橋は一人で立って渡ることが出来ないで両手を大人とつないで渡る。はしごを自分で渡る時は四つんばいで行くかまたは一段上って段の間に入り、また一段上って一段進む。高いはしごと低いはしご2つある場合、Bは自ら高いはしごを選ぶ。また、その時の遊びの中心となっていることに後ろからついていったりボランティアと一緒に遊んだりと積極的に人と関わりを持ちたがることが多い。逆に、一人で遊ぶことは少ない。空いたロッカーに入ることやピアノに映った自分や人の顔を見ることが好きである。壁に貼られた動物の絵や遊んでいる友達を一人ずつ指さすということもよくおこなっている。

Cさん：すべり台とはしごで遊ぶことが多い。Cは一つの遊具に繰り返し何度も来て一人で遊んで

いる。はしご 巧技台 一本橋というように続けて遊ぶことは少なく、一つの遊具で遊ぶか巧技台を使わずに別の遊具へ一旦下に下りて向かう。はしごは一人で渡ることが出来る。サーキットで遊んでいない時はカーテンの側に立っているか壁際に座りこんでいる。自分から先生やボランティアに関わろうとはしない。

Dさん：自分から積極的に遊ぼうとはしないが先生に「すべり台しよう」というように声をかけられるとそちらの方へ向かう。他の子どもと遊んだりボランティアと関わったりすることもほとんどないが、誰かが面白いことをして遊んでいると、それを見て楽しんでいるようである。すべり台はゆっくりではあるが叫人で上り下り出来る。はしご・一本橋・平均台は大人の手を借りて渡っている。

Eさん：Eはすべり台で遊ぶことが多い。時間の後半になるとはしごや一本橋でも遊ぼうとする。すべり台は続けて何度もかけ上がったたりかけ下りたりすることが多い。すべり台を上って、巧技台から飛び下りることもよくしている。はしごや一本橋は一人では出来ないので片手を大人とつないで渡る。遊具で遊んでいない時は部屋を歩き回ったり自分が信頼している人（クラス担任など）の顔をのぞき込んだりしている。あまり慣れていないボランティアの場合は、背後まではやって来ますがその人と目が合うとその場を離れていく。

Fくん：サーキット遊びの遊具であまり積極的に遊ぼうとしない。すべり台の下に座っていることが多いが、時々すべり台を上ってみたり、一本橋を大人の手を借りて渡ったりする。すべり台は一人で出来るが、はしご・一本橋は大人の手を借りている。他には部屋の中を歩き回ったり窓の外を眺めていたりすることが多い。他の子どもや先生・ボランティアと自分から関わろうとすることがなく一人で遊んでいる。

Gくん：自分からはサーキット遊びで遊ぼうとしない。先生に手を引かれて巧技台を歩いていく。すべり台は座り込んだままなので、すべり台の下から先生に足を引っ張られてすべっている。特にはしごが苦手なようで手を引かれてもなかなか行こうとしない。先生に手を引かれない時は床に座って手足をばたばたさせている行動がよく見られる。

Hくん：続けて二つの遊具で遊ぶことが多い。はしごでよく遊ぶ。一本橋・はしご・平均台すべて一人で出来る。高いはしごと低いはしご両方で遊ぶ。遊具で遊んでいない時はマットで飛び跳ねたり、マットの上を寝たまま転がったり、部屋を歩き回ったりといつも動いている。高い所から飛び下りるのが好きで、よく巧技台の上からマットへ飛び下りている。いつも一人で遊んでいる。ある時にはマットの上に寝そべったまますべり台の下へ入り込み、Y先生がそれを見つけてすべり台の下からHを出していた。

Iくん：どの遊具でも遊ぶが一本橋や高いはしごは高さがあるため、少し苦手なようで、サーキット遊びが始まってしばらく時間が経過してから一本橋やはしごに遊びに来る。どの遊具も一人で出来る。一人で遊んでいることも多いが、先生やボランティア・友達にも自分から働きかけ、OやPと一緒にすべり台をかけ下りたり、私にぶら下がったりしていることもよくあった。すべり台の上の巧技台や一本橋に座って周囲を見ていたり、一本橋の上に座ったまま進んでいたりもした。比較的サーキット遊びの遊具で遊ぶことの多い子である。

Jくん：Jは、はしごやすべり台など一つの遊具で遊ぶと続けて他の遊具や巧技台へ行くのではなく、一旦下りて部屋の中をうろうろ歩き回った後、再びはしごやすべり台へ来る。これをいつも繰り返している。Jははしごや一本橋も大人の手を借り

ることなく一人で出来る。すべり台・高い方ははしご・一本橋で遊ぶことが多い。高いはしごと低いはしご二つある時は自分からは低いはしごの方に向かわない。すべり台はかけ下りることが多い。幾つもの遊具で続けて遊べるようにと、a先生がいつもJの近くにおいて「Jちゃ-ん、はしご」と一つの遊具が終わりそうになったら指示を出すということを繰り返し、はしご-巧技台 一本橋といったように2~3の遊具で続けて遊ぶことが多い。

Kくん：Kはどの遊具でも一人で出来るが、はしごは少し怖いらしく、大人の手を借りたがる。L・O・Pと特によく遊び、とQともよく遊ぶ。

「Lちゃんすべり台行こう」などと他の子に働きかけたり、誰かが面白いことをおこなってればそれを真似しながら「Oくんしよう」と誘ったりする姿も見られる。また、他の子の特徴的な部分の真似をし、先生やボランティアにそれを見せ、相手の反応をうかがっていることもしばしばある。いつも子ども・先生・ボランティアの誰かと一緒に遊んでいて、一人で遊ぶことは少ない。

Lくん：どの遊具も得意で続けて何度も遊具で活発に遊ぶ。例えば、すべり台をかけ上がる 一本橋 高いはしご 平均台 飛び石 低いはしご 高いはしご ...というように続けて遊ぶ。すべり台とはしごでよく遊ぶ子である。高い所からd先生や私に飛びつのが好きで、d先生や私が立っているのを見ると飛びついてくる。いつもOやPやKと遊んでいるが、他の子ども達ははしごを1回渡るところをLは少なくとも2回渡っている。誰かが面白い遊び方をしていたら、その子どもの真似をして遊ぶことも多い。マットで飛び跳ねたり部屋を歩いたりするところはほとんど見られない。

Mくん：基本的にあまりサーキット遊びの遊具で遊ぼうとしない。概ね一人で遊んでいる。先生と一緒に遊ぼうと声をかけるとサーキットで遊ぶが、自発的に遊ぶことは少ない。はしごの下に入った

りすべり台の下に入ったりマットの上に寝そべっていたりしていることが多い。下に入る度に危ないからと先生に言われては出てくる。よくはしごを持ち上げようとして、これも先生に止められている。他にはサーキットの中央部分で、仮面ライダー龍騎ごっこをよくしている。これは変身ポーズをとつたり、架空の敵に向かってキックやパンチをしたりするものである。サーキット遊びの遊具で遊ぶ時は、はしごとすべり台によく来る。はしごは一人で出来、すべり台は上ることが多い。

Nくん：はしごが若手で、あまりサーキット遊びが好きでないらしく、先生やボランティアの側にいるか窓の外を眺めていることが多い。「だっこ」と身体的接触を頻繁に求めてくる。はしごで遊んでいても途中で先生やボランティアに抱きつこうとしたり、巧技台からは受けとめてもらうために繰り返し飛び下りて大人に抱かれたがったりする。サーキット遊びでよく遊ぶ遊具はすべり台であり、歩いて下りることが多い。

Oくん：どのサーキットの遊具でもよく遊ぶ。一つの遊具で遊び終わると巧技台の上を歩いて次の遊具へと向かう。はしごやすべり台の下に入るとはよくあるが、部屋の中を歩き回ったりマットの上に寝そべっていたりすることはほぼ無い。はしごは立って一人では出来ないの大人の手を借りている。一人で渡る時は四つんばいになって進むか一段上がって段の間に入り、また一段上るという繰り返しで進む。特にL・P・Kとよく遊び、Qやとも一緒に遊んでいる。このうちの誰かと手をつないで巧技台を歩いたり、一緒にすべり台をかけ下りたりしている。誰かが面白いと思うことをしているとその真似をよくする。巧技台の上を四つんばいで進んだりはしごにぶら下がったりして遊んでいる。ボランティアとも遊ぼうとし、抱きついてきたりぶら下がったりしている。

Pくん：Pはサーキットのどの遊具でもよく遊ぶ。

一人で遊ぶよりもO・K・L、そしてQや と遊ぶ姿を目にする。Pは自分から誰かと手をつないで巧技台を歩いたり、すべり台を一緒にかけ下りたりしている。また、「bせんせ-い」と呼びかけb先生と積極的に遊ぼうと声をかける。またボランティアが立っている所に来るとボランティアを指さし、「お姉ちゃん(お兄ちゃん)」と言って手を振る。はしごは大人の手を借りて渡る。誰かが四つんばいになって渡ったり、一段上って段の間に入ってまた一段上るという渡り方をしたりしない限り、自分からはこのように渡ることはない。このような渡り方は遊びとしておこなっているようである。

Qくん：サーキット遊びの遊具でよく遊び、はしごやすべり台の回数は多い。その一方で一本橋やはしごやすべり台にぶら下がったりしていることも多い。遊具にぶら下がる度に先生に止められている。とにかくよく動き回る子で、一人で遊ぶことも多いが、K・L・O・Pの誰かと手をつないで巧技台を歩いたり、すべり台を一緒にかけ下りたり上ったりして遊んでいることもある。面白いと思うことを誰かがおこなっていれば、すぐにその真似をしている。髪の長いボランティアがいればゴムを取ろうと狙っていたり、ボランティアの足にくっついていたりすることも多い。

Rくん：自分からは遊ぼうとしないで、e先生と一緒にサーキット遊びに加わっている。Rが前になりe先生が後ろになって両手をつなぎ、e先生がRのバランスをとりながら進む。サーキット遊びに加わらない時は、歩くことも少しはあるが、たいいていマットの上に座って手を上下させている。自分から他の子と遊ぼうとしたり他の子の真似をしたりする様子は見られない。またボランティアとも自分から関わろうとしない。しかしボランティアが手を引いてサーキットの遊具に連れて行っても嫌がる様子は見られない。

第3章 サーキット遊びのデータ分析

3-1 分析方法

はしごやすべり台へ誰が来たか、はしごとすべり台にそれぞれ子どもが来た回数・子どもの視線といった詳細な情報を得るために、実際にサーキット遊びに参加して観察することと並行してその遊びの様子をビデオに撮った。このビデオを基に、サーキット遊び一つ一つを見ていき、毎回サーキット遊びで使われていたはしごとすべり台に子どもが来て遊んだ回数を毎分子ども別に記録していった。その合計を出しグラフとし表したものがグラフ1・2である。これらのグラフの大きな特徴は、子どもが来て遊んだ回数の多い時間帯と少ない時間帯にはっきりと分かれていることである。ここで挙げられる回数の多い時間帯を山、回数の少ない時間帯を谷と名付ける。この谷とは、はしご遊びでは(グラフ1)20回以下で、すべり台遊びでは(グラフ2)50回以下の時間帯を指す。ただし、サーキット遊びが終わる時間は約20分から40分と日によって異なる。調査期間中では最も短い時間で19分、最も長い時間で33分、平均すると24.3分であった。このため、25分以降のデータ数は少なくなる。

また、誰がどのくらいの回数はしごやすべり台に来て遊ぶか、それぞれの子どものはしごやすべり台によく来て遊ぶ時間帯はいつなのかといったことを知るために、全はしご遊びとすべり台遊びで、子どもごとの回数の割合と時間が経過していく中で子どもごとの回数の割合もグラフとして示した(子ども別回数の割合がグラフ3・4で、時間の経過での子ども別回数の割合がグラフ5・6である)。ここからはしご遊びとすべり台遊びにはどのような特徴があるかを見出していきたい(この章で注記されたグラフは巻末のグラフ一覧を参照のこと)。

グラフ1・2より、ある時点の次の時間が0回で

あり、かつ、ある時点よりも前の時間に1以上の回数がある場合を谷直前の点と呼ぶ。

3-2 分析結果

はしご遊びとすべり台遊びでの一日ごとの回数のグラフからは、その時何人がはしごまたはすべり台に来て遊んでいるかは分かるが、全体としてどれくらいの人数がはしごまたはすべり台に来ているかは分からない。そこでピーク時の人数を割合で示してみる。はしご遊びで、一日毎の回数がピークとなった時間に来た子ども達の人数を平均すると4,4人で、全体における割合は31.4%である。一方すべり台遊びで、一日毎の回数がピークとなった時間に来た子ども同時に3人から4人、すべり台は1人から2人しか遊べない。サーキット遊びがおこなわれている部屋もそんなに広くない割に、すべり台遊びでは高い割合を示しているのではないだろうか。

はしご遊びとすべり台遊びを比べると、すべり台遊びが高い割合を示している理由は、はしごで遊ぼうとすればはしごでは渡りきるのに多少時間がかかるが、すべり台では上り下りにほとんど時間がかからないということ、すべり台をサーキット遊びの他の遊具で遊ぶ際の出入口として使っていることの2点から割合が高くなっていると考えられる。

サーキット遊びではないが、調査期間中にも全体活動の時に、近くにある幼稚園と交流保育がS施設で何度かおこなわれていた。調査期間中に交流保育の時に開催されていた遊びは、外遊び・新聞紙遊び・ダンボール遊びであった。外遊びを、例にとって、S施設の子どものと幼稚園の子どもの遊び方の違いを見てみたい。

幼稚園の子どもの多くはシャベルやバケツを取りに行った後、そのまま砂場へ行き、外遊びが終わるまでずっと砂場で遊んでいた。子ども同士

の相互協力は見られなかったが、「ぬくの(型抜き)貸して」といった子ども同士または大人とのやりとりは見られた。先生が「ちゃん何作ってるの?」などと聞き、その子が「ケーキ!」と答え、それに対して先生が、「xxくん、ケーキだって。大きくておいしそう。食べたいなあ」、「いいよ」、先生「ちゃん、いいの?じゃあxxくん一緒に食べよう」と、子ども達の間に入って一緒に遊ぶ様子が見られた。

一方S施設の子どもの達はシャベルやバケツなどを持って砂場へも来るが、2~3分遊ぶと他の遊具へ行ったり園庭を歩き回ったりして、4分から5分以上同じ場所で遊ぶ様子はほとんど見られなかった。幼稚園の先生が「一緒にしよう」とBの手を取ろうとしたが、Bは手を引っ込めそのまま別の場所へ行っていたり、砂場にいて手で砂をつかんで離すということを繰り返していたりした。Hに対して幼稚園の先生が「プリンどうぞ」と型抜きで何個か砂の型を作って並べていたがHは特に何の反応も示す様子はなかった。

また、S施設と幼稚園の子どもの同じ所で遊んでも、お互いに遊ぶ様子は見られなかった。

印象ではあるが、このようにS施設の子どものはサーキット遊び以外の遊びでも周期性が見られるのではないかと予測されるが、幼稚園の子どものにはこの周期性はあまり見られないのではないだろうか。

3-3 はしご遊びのデータ分析

グラフ1より、はしご遊びでの山は3回あって、谷は2回ある。サーキット遊びが始まって、はしご遊びで先に起こるのは山で、次に谷が来る。この山と谷は交互に起こる。はしご遊びの中での3回の山を比べると、一番目よりも二番目、二番目よりも三番目が小さくなっている。一日ごとの子ども別回数のグラフにも同様の傾向が見られる

(例：グラフ 7)。はしご遊びの中で、山と谷が起こるのは概ね同じ時間である。山の形は、緩やかに増え 3 分から 5 分でピークを迎えて、徐々に減り始めたのちに 9 分から 10 分で急速に落ち込み、谷を迎えるというものである。谷は、約 10 分ごとにきれいにやって来る。子ども別回数のグラフ(例：グラフ 7)を一日ごとに見ても、山の上がり下がりにははしご遊びの回数の合計を示したグラフ 1 と概ね同じ時間に起こる。また、一日のサーキット遊びの中で高いはしごと低いと二つある場合にも、それぞれのはしごとにグラフ 1 と同じような形の上がり下がりを見せ、谷の来る時は毎回約 10 分ごとである(グラフ 8、9)。はしごで遊ぶ一人当たりの回数が多い子どもは $H \cdot L \cdot Q$ である(グラフ 3)。 $H \cdot L \cdot Q$ は山の時間帯によく遊んでいる。この 3 人は谷の時には一人当たりの回数も少なくなっている(グラフ 5)。これは、 $H \cdot L \cdot Q$ ほど回数が多い他の子ども達にもいえることであり、全体的な傾向である。しかしその中で、一人当たりの回数はそれほど多くないにも関わらず(グラフ 3)谷の時によくはしごに来て遊ぶ子どもがいる。それはである。は山の時にははしごに来て遊ぶが、谷の時には山の時よりも頻繁に来て遊ぶ。更に、谷の時に が来て遊ぶ割合は他の子どもに比べて圧倒的に多い(グラフ 5)。

3 - 4 すべり台遊びのデータ分析

グラフ 2 より、すべり台遊びでは山が四つ、谷が三つあり、谷の来る時間はまちまちのように見える。しかし、一日ごとにすべり台遊びの子ども別回数のグラフを見ると、山は 3 回で、谷は 2 回あり、約 10 分ごとに谷がやって来る(例：グラフ 10)。すべり台遊びでは 2 回目の山のピークを迎える時間が早い時と遅い時があるために、グラフ 2 では 9 分から 23 分の間に二つ山が起きているように見えるのである。よって、すべり台遊びもは

しご遊びと同様に山が三つ、谷が二つある。サーキット遊びが始まって先に起こるのは山で、次に谷が来る。山と谷は交互に起こる。すべり台遊びの中での 3 回の山を比べると、一番目よりも二番目、二番目よりも三番目が小さくなっている。一日ごとの回数のグラフも同様の傾向が見られる(例：グラフ 10)。山の形は、緩やかに回数が増えていってピークを迎え、ピーク以降は急速に回数が減り、谷を迎えるというものであるが、すべり台遊びでははしご遊びのようにほぼ一定時間に増減があるのではなく、山の時の回数にばらつきがあるため、多少幅がある。

すべり台で遊ぶ一人当たりの回数が多いのは、 $E \cdot J \cdot L \cdot Q$ である(グラフ 4)。山には $E \cdot J \cdot L \cdot Q$ の一人当たりの回数も多くなり、谷には一人当たりの回数も少なくなっている。これは全体的な傾向でもある。

第 4 章 分析結果による仮説とその検証

3 - 2、3 - 3 で述べたような波はどうして起こるのだろうか。はしご遊びでもすべり台遊びでも毎回約 10 分間隔で谷が来ている。ここではその仮説を立て、それぞれの仮説について考えていきたい。

4 - 1 周期性に注目した仮説

4 - 1 - 1 仮説 1：飽きる

子ども達がサーキット遊びに飽きてしまい、谷が来るために山と谷が起こるのではないだろうか。子ども達がサーキット遊びに満足し飽きるに至る時間が約 10 分だと仮定する。多くの子ども達がサーキット遊びに飽き、谷の間にそれまであまりこれらの遊具で遊んでいない子どもが来て遊んでいると、この子どもに子ども達が同調してはしごやすべり台に再び集まって来ると考えられる。

検証：この仮説が当てはまるならば、谷の時にはほとんどの子どもがはしごやすべり台にあまり

興味を示さないのではないか。そして、谷の時によく遊ぶ子どもがいるために再び山が起こるが、ほとんどの子ども達は既にこれらの遊具に勉強しているために起こる山は時間の経過と共により小さくなっていくはずである。

ビデオの観察結果より、谷の時にはサーキット遊びそれぞれの遊具で子ども達はあまり遊ばず、マットの上で飛び跳ねたり部屋の中を歩き回ったりしている。やはり遊具に飽きているようである。

次に、データ結果より(グラフ 3・4) 山の時にはそれ程多くはしごやすべり台に来てあそびないが谷の時によく来て遊ぶ子どもは、はしご遊びは で、すべり台遊びでは該当する子どもは見られない。全はしご遊びで がはしごに来て遊んだ回数の占めている割合は 6%に過ぎず(グラフ 3) これはそれ程多いとはいえない。しかし、谷の時にはしごに来て遊ぶのは だけではない(グラフ 1)。はしごに来て遊ぶ回数の多いH・L・Qも他の子どもに比べて谷の時によく来て遊んでいる。この3人は谷の時のみ多く来るのではなく山の時にはしごによく来て遊んでいる。この3人がはしごに来て遊ぶ回数の割合は山の時よりも谷の時が少なくなる(グラフ 5)。これはすべり台遊びで回数の多い子どもE・J・L・Qにも同様のことがいえる。

また が山の始まる点にはしごに来て遊ぶ回数は8回である。山の始まる点に多く来て遊ぶ子どもの回数は17回である。これに比べて の回数は決して多いとはいえない。この2点から がはしごに来て遊んでいることに同調して子ども達ははしごに集まって来るかは不明である。すべり台遊びでは山の時にそれ程多くすべり台に来ないが谷の時にはよくすべり台に来て遊ぶ子どもは該当しないことから、このような子どもが同調を引き起こしているとは考えにくい。

このようにして子どもがはしごやすべり台に集

まって山が起こるが、グラフ 1 より、時間の経過と共に動員される人数が減り、起こる山は小さくなっていく。ここからも、子ども達がサーキット遊びに飽きていることを示しているといえる。

以上より、子ども達がサーキット遊びに飽きて谷が来ているといえるが、山の時よりも谷の時に遊具によく来て遊ぶ子どもに同調して山が起こるとは考えにくい。

4 - 1 - 2 仮説2：先生の呼びかけのむら

実は子ども達はサーキット遊びに興味がない。しかし先生に遊ぶように声をかけられるので、子ども達はサーキット遊びの遊具で遊んでいるのではないだろうか。先生の集中力の持続時間は約10分間である。山の時は子ども達に遊ぶように先生が声かけをしている。けれども、先生の呼びかけが約10分で途切れるので、谷がやって来る。これが繰り返して起こっているのである。

検証：この仮説が当てはまるならば、先生が子どもを遊ばせていることになる。そのためには先生が子どもに「こっちにおいでよ」などと声をかけたり、子どもを遊具へ連れて行ったりということを頻繁におこなうはずである。しかしビデオの観察結果から、サーキット遊びが始まって、ある程度時間が経過してもサーキット遊びの遊具で遊ばない子ども達に対してこのようにおこなわれるということが分かる。他の子ども達は先生に何も言われなくても自分で遊具に向かう。

また、サーキット遊びの遊具で遊んでいる子どもに、別の遊具のところにいる先生が「ちゃん、こっちのしよう」などと声をかけることもあるが、その子どもが呼びかけた先生がいる遊具に行くとは限らない。多くの場合、声をかけられても自分が行きたい方へ行っている。

以上より、先生の呼びかけによって山と谷が起こるとは考えにくい。

4 - 1 - 3 仮説3：子どもの体力の持続

サーキット遊びの遊具で遊ぶ子ども達は何回も遊んでいるために疲れてくる。山が約10分続いた後、谷が続くということが繰り返起こるのは、約10分で子どもの体力が持続しなくなり、休憩を必要とするためではないだろうか。

検証：この仮説が当てはまるならば、谷の時は疲れていて休憩しているはずである。

しかしビデオの観察結果から、谷の時はマット上で飛び跳ねたり部屋の中を歩き回ったりしていて、疲れているためにサーキット遊びの遊具で遊ばないようには見えない。

以上より、子どもの体力が持続している間は山で、持続出来ず休憩が必要で谷になるとは考えにくい。

4 - 1 - 4 仮説4：個人行動と大人との接触で起こる波

子どもは自分で遊んでは大人と接触を持ち再び自分で遊ぶ、という行動をとりがちである。サーキット遊びをしている時にも同様のことがいえ、山の時は子ども達が大人と接触したがるために遊具によく来て遊び、谷の時は子ども達が一人で遊びたがるために遊具に来て遊ぶことが少ないと考えられる。つまり、大人と接触するために遊具に来て遊ぶ時間が約10分あり、その後自分で遊ぶ時間があるという繰り返しによって山と谷が繰り返起こるのではないだろうか。

検証：この仮説が当てはまるならば、山の時に遊具で遊ばずに大人と接触するためだけに遊具の周りに来る子どもが多く見られるはずである。更に、遊んでいる山の時には先生やボランティアの人数の多い遊具に子どもが集まって先生やボランティアと言葉や身体の接触を図り、谷の時には大人と接触を図ることが少なくなり一人で遊んでいることが多くなるといえるはずである。

ビデオの観察結果より、確かに山の時に先生やボランティアに巧技台の上から飛びついたり目を合わせたりするといった大人と接触を図る子どもが多く見られる。しかし大人と接触するためだけに遊具に来るのでなく、多くの子どもが山の時に遊具で遊びつつ大人と接触を図っている。また、山の時には子ども達はサーキット遊びの遊具に集まって来て、サーキット遊びの遊具の付いている先生やボランティアの肩や手に触れたり目を合わせたりする。子どもがだっこを求めてきたり、大人にぶら下がろうとしたりするのもこの山の時である。時々サーキット遊びの途中で、ある遊具に付いている先生やボランティアが移動し他の遊具に先生やボランティアが多くなると、自然に子どもの人数も先生やボランティアが多く付いている遊具に集まってくる。しかし谷の前は、先生やボランティアの人数が多いところでも関係なく子どもの人数が減っていく。谷を迎えるのは、子ども達それぞれのリズムで遊ぶのをやめるからだと考えられる。

谷の時に子どもがサーキット遊びの遊具で遊ぶ場合、サーキット遊びの遊具に付いている先生やボランティアには触れようとせず、目も合わせないことが多い。遊具に付いている先生やボランティアの側を素通りしているといってもいいくらいである。谷の時には他に、はしごの下にもぐり込んだり部屋を一人で歩き回ったりしている子どもの姿がよく見られる。

以上より、子ども達は山の時に大人と接触しているが、大人と接触するために遊具に来て遊び、山が起こるとは考えにくい。けれども、山の時は集団で、谷の時には一人で子ども達が遊んでいるとするならば、子どもは集団で遊ぶ場合に遊具で遊びながら大人と接触したがるかと推測することは出来る。

4 - 2 同調性に注目した仮説

4 - 2 - 1 仮説5：最初に遊ぶ子どものリズム

はしご遊びとすべり台遊びで、山が始まる点によく来る子どもが他の子どもを誘導し、山が起こるのではないだろうか。そして谷が来るのは、山が始まる点に来る子どもがその遊具から離れていくからであると考えられる。山が始まる点によく来る子どもが遊具から離れていく時間が約10分という時間ではないだろうか。

検証：最初に遊ぶ子どもとは、1回のサーキット遊びの中で、回数が1分以上0回（つまり誰もいなくなった）になった後に、山が始まる点に最初に来る子どもと定義する。この場合、その子どもが来たその次の時間が0回になっている場合は除くこととする。山が始まる点によく来る子どもをはしご遊びとすべり台遊びでそれぞれで挙げてみる。はしご遊びはA(10回)・H(17回)・L(11回)、すべり台遊びはE(6回)・J(8回)である。

この仮説が当てはまるならば、山が始まる点によく来る子どもに同調して全体の回数が多くなるだろう。よって、谷直前の点に来る子どもの中に、はしご遊びではA・H・Lが、すべり台遊びではE・Jが、それぞれはしご遊びとすべり台遊びにおいて見られないはずである。

実際のデータから、谷直前の点に来る子どもに注目する。谷直前に来る子どもの中に、はしご遊びではAは2回・Hは4回・Lは10回はしごに来ていることが見られる{回数が多い子どもは(11回)・0(8回)・L(10回)である}。一方すべり台遊びではEは2回・Jは2回すべり台に来ていることが見られる{回数が多い子どもは(3回)・0(4回)・Q(6回)である}。

以上より、山が始まる点に来る子どものリズムによって、山が約10分続いた後、谷が続くということが繰り返し起こるとは考えにくい。

ただし、山が始まる点によく来る子どもに同調

して山が起こるが、谷が来るのはそれぞれの子どものリズムで遊ぶことをやめるからだと考えた場合、この仮説は成り立つ。

4 - 2 - 2 仮説6：回数が多い子どものリズム

子ども達はサーキット遊びの遊具である程度遊ぶと満足する。そのため、谷がやって来る。しかし中には満足出来ない子どももいる。回数が多い子どもは他の子どもが満足して遊ぶことをやめてもずっと遊んでいる。何回も遊んでいる子どもがいるため、他の子どもがそれに動かされ再び山がやって来るということが繰り返し起こるのではないだろうか。

検証：グラフ1・2より、この中で10%以上の子どもを回数の多い子どもとした。はしご遊びではH・L・Qで、すべり台遊びではE・J・L・Qである。

この仮説が当てはまるならば、仮説3の検証と同じように考え、はしご遊びではH・L・Qのリズムが、すべり台遊びではE・J・L・Qのリズムが、山が10分続いた後、谷が続くということを繰り返し引き起こしているはずである。

以上により、回数が多い子どものリズムが必ずとはいえないが山と谷を引き起こしていると考えられる。また仮説3の検証より、山を起こしているのは回数が多い子どもであるが、谷が来るのはそれぞれの子どものリズムで遊ぶのをやめるからだと考えれば、この仮説は該当する。

けれども回数の多い子どもが遊具に来て遊ぶのは山の時よりも谷の時が少ないが、回数が多い子どもは山の時にも谷の時にも遊具によく来てサーキット遊びが始まって終わるまでずっと遊具で遊んでいる状態である。この点から、回数が多い子どもが遊具に来て遊ぶために山が起こると明確にはいえない。

4 - 2 - 3 仮説7：マイペースな子どもの遊びのペース

マイペースな子どもが谷の時にははしごで遊ぶことによって、マイペースな子どもに同調してほかの子どもも遊びだし、山が起こるのである。そしてマイペースな子どもはある程度遊ぶと満足してはしごから立ち去る。すると、ほかの子どもも遊ばなくなり、谷がくる。このようにマイペースな子どものペースで山と谷が繰り返されるのではないだろうか。

検証：谷にもかかわらず、谷の時に多く遊んでいる子どもがいる。Iである（グラフ5）。これをマイペースな子どもとする。この仮説が当てはまるのならば、Iがない日は山が10分続いて谷がくるという繰り返しは起こらないはずである。けれどもIがない5月1日のはしご遊びでも、他の人同じように山が約10分続いた後、谷が続くということが繰り返し起こっている。

以上より、マイペースな子どものペースで山と谷を引き起こしているとは考えにくい。

4 - 2 - 4 仮説8：続けて遊ぶ子どものリズム

S施設の子どもはサーキット遊びの遊具をはしご遊び 巧技台 一本橋遊びといったように続けて遊ぶことが少ない。そこで3つ以上の遊具で遊んでいる子どもを続けて遊ぶ子どもとする。当てはまるのはL・K・O・Pである。

サーキット遊びを続けて遊ぶ子どもの流れに周りの子が乗ってきて、山が10分以上続いた後、谷が続くということが繰り返し起こるのではないだろうか。

検証：この仮説が当てはまるならば、これも仮説3と同じように考えて、L・K・O・Pのリズムで山が約10分続いた後、谷が続くことを繰り返し引き起こしているといえるはずである。

山が始まる点に来る子どもは、仮説3より、は

しご遊びではA・H・L、すべり台遊びではE・Jである。谷直前の点に来る子どもは、仮説3の検証より、はしご遊びは $I \cdot O \cdot L$ で、すべり台遊びは $I \cdot O \cdot Q$ である。山が始まる点に来る子どもで、かつ、谷直前の点に来ない子どもはL・K・O・P・Qの中に入らない。

また、続けて遊ぶ子どもが山の始まる点によく来て遊び、この続けて遊ぶ子どもに同調してほかの子どもも遊びだして山が起こり、谷がくるのはそれぞれの子どもが遊ぶのをやめるからだと考えたとしても、当てはまるのはLのみである。

以上より、続けて遊ぶ子どものリズムが山と谷を繰り返し引き起こしているとは考えにくい。

4 - 2 - 5 仮説9：2～3人のグループのリズム

2～3人のグループは遊びの中心となっていて、それについていく子どもが出てくる。このようについていく子どもがいるために、山と谷が繰り返し起こるのではないだろうか。約10分ごとに谷がくるのは、2～3人のグループの子どもたちのリズム性が現れているのである。

検証：手をつないで巧技台を歩き遊具までいき、順番で遊具で遊ぶといった何らかの相互干渉のある子ども同士を2～3人のグループとする。L・K・O・P・Q・I間でこれはみられる。

この仮説が当てはまるならば、仮説3と同じように考えることができる。2～3人のグループのリズムによって山が約10分続いた後、谷が続くということを繰り返し引き起こしているはずである。

山が始まる点に来る子どもは、仮説3より、はしご遊びではA・H・L、滑り台遊びではE・Jである。谷直前の点に来る子どもは、仮説3の検証より、はしご遊びは $I \cdot O \cdot L$ で、滑り台遊びは $I \cdot O \cdot Q$ である。山が始まる点に来る子どもで、かつ、谷

直前の点にこない子どもはL・K・O・P・Q・Iの中にいない。

2人から3人のグループの子どもが山の始まる点によく来て遊ぶことで、これに同調して他の子どもも遊ぶようになって山が起り、谷が来るのはそれぞれの子どもの遊びをやめるリズムだと考えたとしても、はしご遊びとすべり台遊びで同時に当てはまる子どもはいない。

以上より、2~3人のグループの子どものリズムが山と谷を繰り返し引き起こしているとは考えにくい。

4 - 2 - 6 仮説 10：他者との関係を持ちたがらない

実は子ども達は他の子どもや先生・ボランティアと遊びたいとは思っていないためにはしごすべり台に子どもが集まっても約10分でその場からいなくなるのではないだろうか。

検証： この仮説が当てはまるならば、山の時にも谷の時にも他の子どもや先生・ボランティアに子どもが自分からは関わろうとしないはずである。

ビデオの観察結果より、確かに谷の時にはマットの上を飛び跳ねたり部屋にあるロッカーの上に上ったりと一人で遊んでいることが多い。ここから、谷の時には他者との関わり持たずに遊びたいと子ども達が思っているといえる。しかし山の時には、2人から3人のグループで遊ぶ子どもがいたり先生やボランティアに抱きつく子どもがいたりする。よって、山の時に他者との関わりを持たずに遊びたいと子どもが思っているとは考えにくい。

以上より、他の子どもや先生・ボランティアと関わりたくないと思っているとは考えにくい。

第5章 考察

なぜサーキット遊びのはしごとすべり台で一定

の波が起こるかについて第4章で仮説を立てそれぞれについて検証していったが、確定出来る説は残らなかった。よって周期性と同調性が複合してこの波は起こると考えられる。つまり、子ども達はサーキット遊びの遊具で遊んでいるが、ある程度遊ぶと遊具に満足し飽きてしまう。この時間が10分なのである。そして多くの子どもが遊具で遊ぶことをやめてしまうので谷が来る。けれども谷の時に何人か子どもが来て遊んでいるため、これに同調して再び子どもが集まって来ると考えられる。また、子ども達は遊具に飽きているために時間の経過と共に起こる山は小さくなっているのである。ここで忘れてはならないのが3-2で触れたように、幼稚園の子ども達にはこのような周期性は見られず、遊びの時間中同じ遊びを続けているようであったことである。これに比べてS施設の子供達は幼稚園の子ども達のようにずっと同じ所で遊んでいることがない。どうしてS施設の子供と幼稚園の子供の間にはこのような差が出てくるのだろうか。これには言葉によるコミュニケーションと社会性の発達に関係していると思われる。S施設の子供達は、同年齢の子供よりも言語面の発達が遅れている子供が多い。三島正英は子供の社会性の発達についての文章の中で以下のように書いている。「幼児が集団で遊ぶ際には、通常発声が多くなっている。遊びの中で互いに仲間と言葉を交わすのは、子どもたちがそれ自体を楽しむとともに、それが参加者間の連携をはかる道具となっていることが考えられる(三島：1994 ミネルヴァ書房)」。

この文章にあるように、S施設の子供達も山の時には発声が多く、谷の時には発声が少なくなり途切れる瞬間も出てくる。ここから、山の時は集団で、谷の時には一人で遊んでいると考えられる。しかしS施設の子供達は、山の時に発声はおこなっていてもその発声が連携を図る道具とはなら

ないために幼稚園の子ども達と違って遊びが続かないのではないだろうか。一般的に 3~5 歳の子どもはまだ子ども同士の結びつきが弱く、3~4 人以上の集団は成り立ちにくいといわれている。それは社会性の発達が不十分なためである。しかし大人が仲立ちになった場合には 3~4 人以上の集団でもうまく遊べる。それに対して S 施設の子も達は、大人が仲立ちになっても集団形成はなされにくい。

言語発達が遅れている子どもは言葉によるコミュニケーションが成立しにくいので、言葉以外の動作や雰囲気といったコミュニケーションの方法をより多く取っている。「ことば以外の表情、まなざし、からだの触れ合いなどによるコミュニケーションが基にあってこそ、ことばも育ってくる(松沢：1990 ミネルヴァ書房)」のであり、子どもにとって身体的接触というのは重要なコミュニケーションの手段の一つである。しかし相手に触れたいと思っても、自分一人でそうするのはなかなか難しい。そのため誰かがしているのを見て、他の子どもも大人と接触するのではないだろうか。S 施設の子も達は集団で遊んでいる山の時に大人と言葉によるコミュニケーションをとる代わりに、発声と身体的接触をより多くとることでコミュニケーションをとっていると考えられる。言葉に障害を持つ子どもの保育についての文章中で「子ども同士の間ではことば以外の動作や雰囲気などを介してスムーズなやりとりをみせる(松沢：1990 ミネルヴァ書房)」とあるように、全面

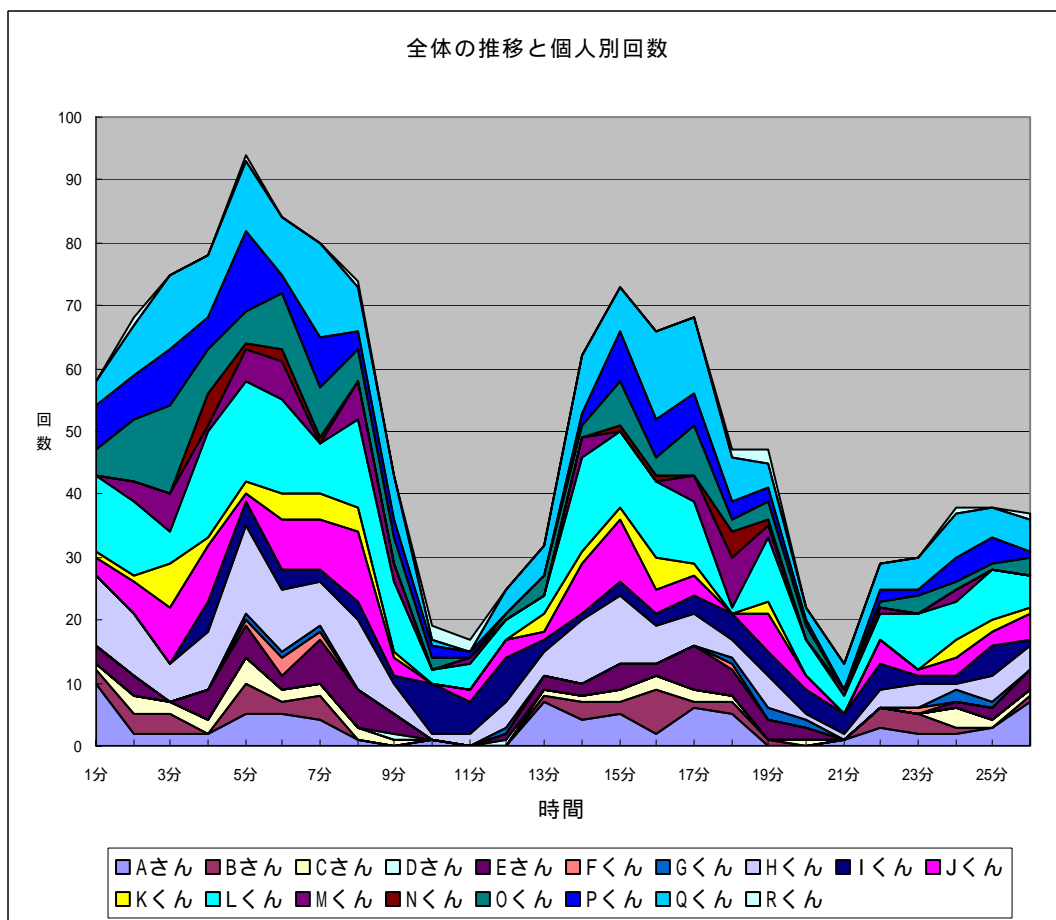
的に言葉に頼らなくてもコミュニケーションをとることは出来るし、遊ぶことも出来る。ただ、遊びが続かないのは仲立ちになるはずの大人に身体的接触が言葉による接触のようにコミュニケーションとしてうまく伝わっていないためではないだろうか。

このサーキット遊びで山と谷の時間が出来ることに近い現象は、私達の日常生活の中でも起こっているように思われる。例えばスーパーの試食販売で誰か一人試食をしていると寄って来やすくなり他の人も集まってくる、ということがよく見られる。このように、人は誰かが立ち止まっているとその場所に集まっていく傾向がある。集まった人々が知らない者同士であればその場からすぐに離れていくが、知っている間柄だと言葉をかけたり挨拶したりして社会関係を保とうとするために集団が持続する。S 施設の集団での遊びは、前者のように結びつきの弱い人間関係であり、S 施設の子も達は対人関係が不得手のように思われる。けれども、このサーキット遊びで見られる子どもの遊びの周期性は本来の個人個人の持っているリズムではないだろうか。子どもも含め私達は社会の中で良くも悪くも他人に影響され、他人と歩調を合わせながら人と人の関係を結んでいかなければならない。このために私達は本来のリズムが崩れ、一所に立ち止まってしまうのだろう。S 施設の子も達の一人遊びは持続することからも、S 施設の子も達はその社会関係に縛られない自由な存在であるといえるのではないだろうか。

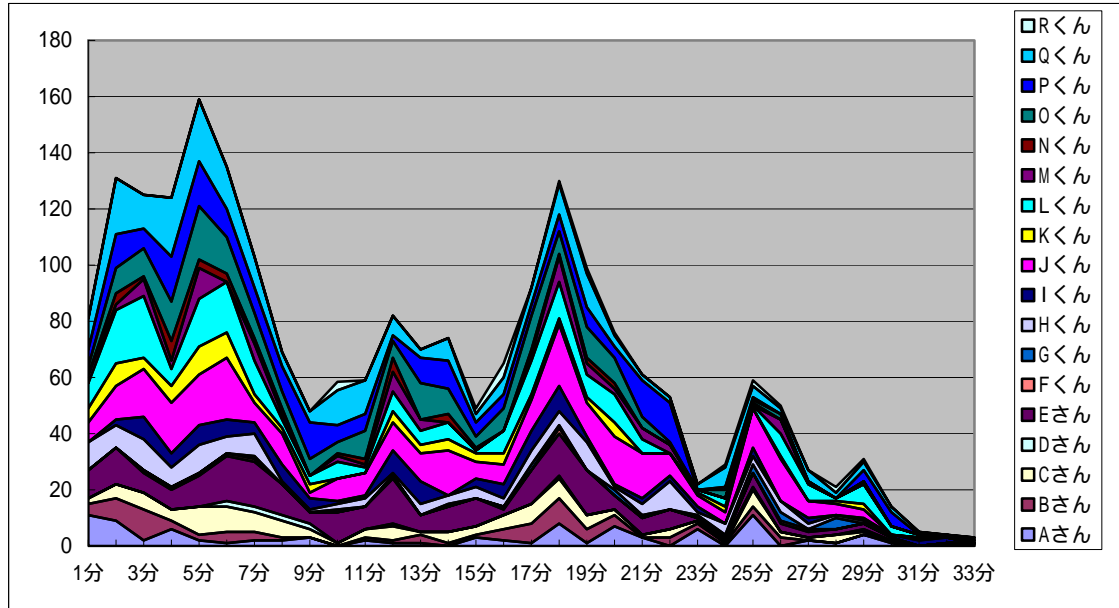
参考文献

- 松沢孝博 1990 「保育でのかかわりと育ち」柴崎正行/大場幸夫編
『保育講座 12 巻障害児保育』 ミネルヴァ書房
- 三島正英 1994 「社会性の発達」 平山諭/鈴木隆男編
『発達心理学の基礎 機能の発達』 ミネルヴァ書房

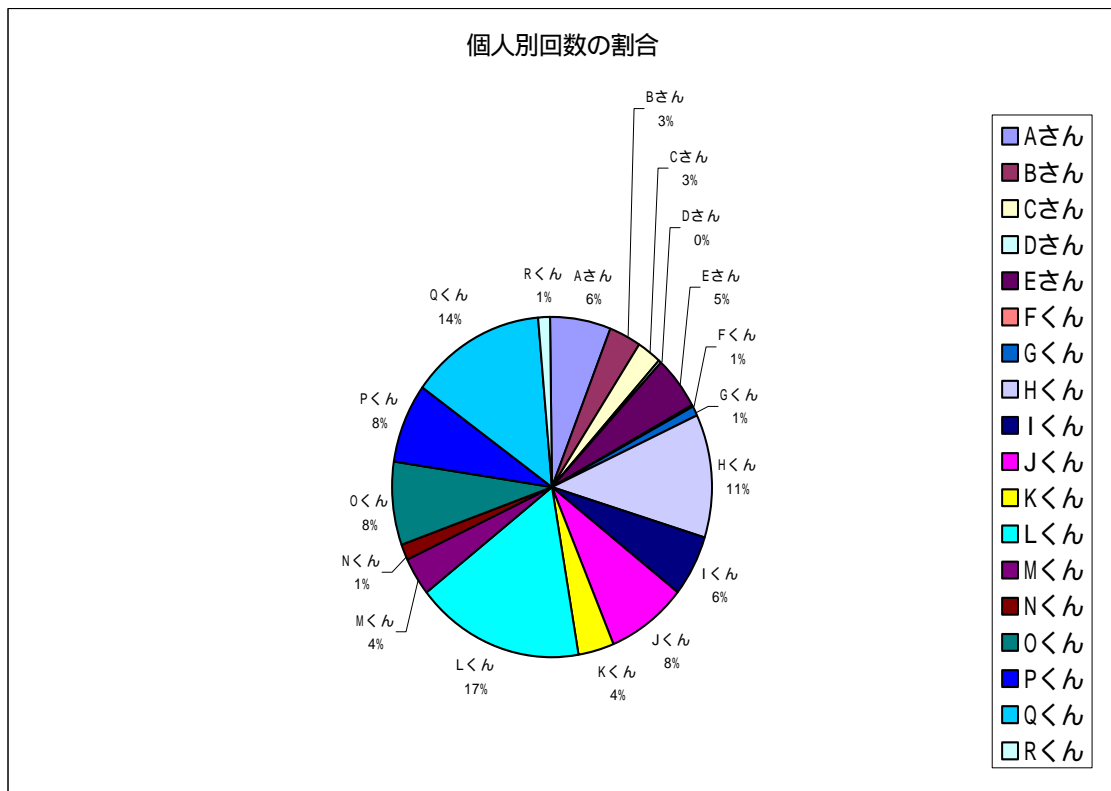
グラフ 1： はしごに来た子ども別回数の合計



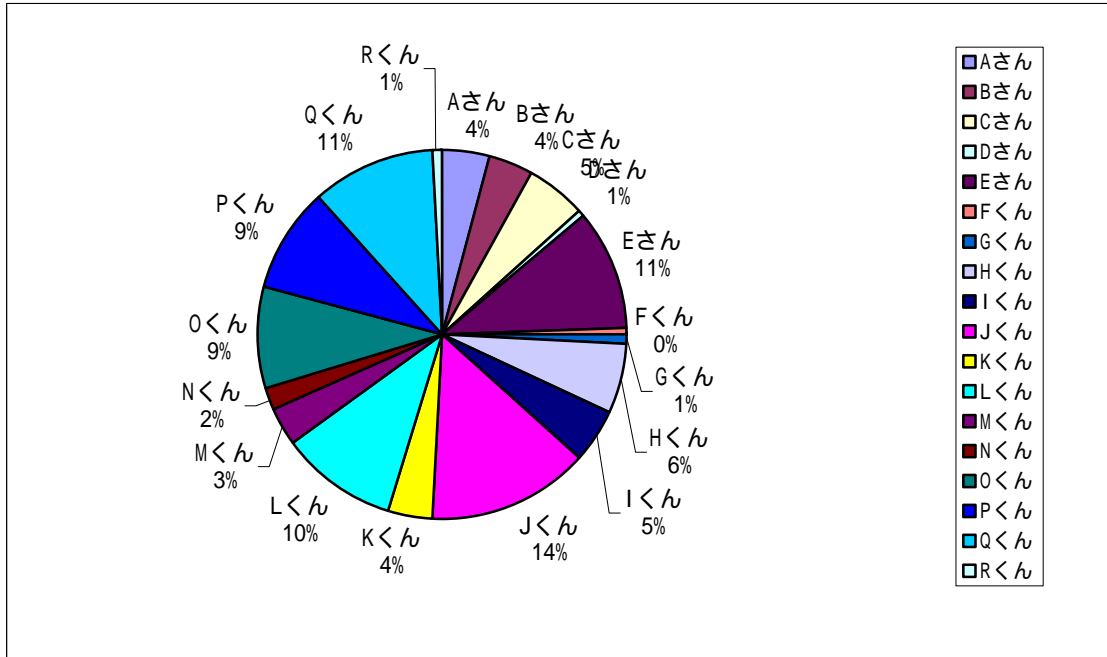
グラフ 2：滑り台に来た子ども別の回数の合計



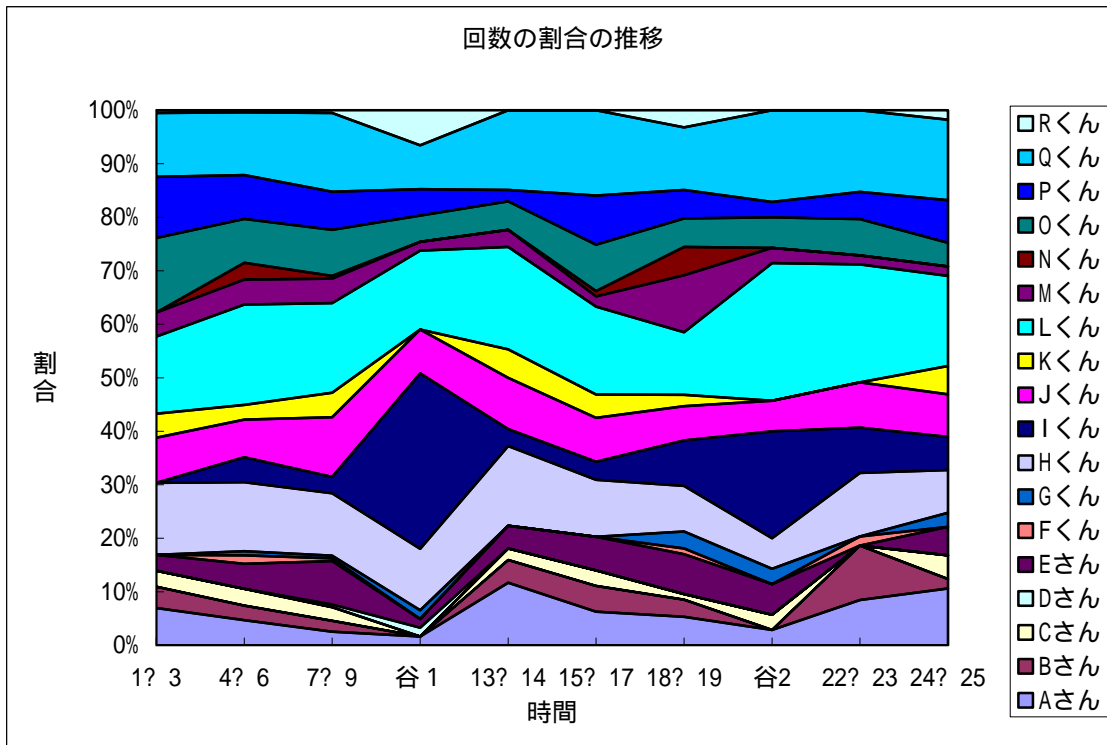
グラフ 3：はしご遊びの個人別回数の割合



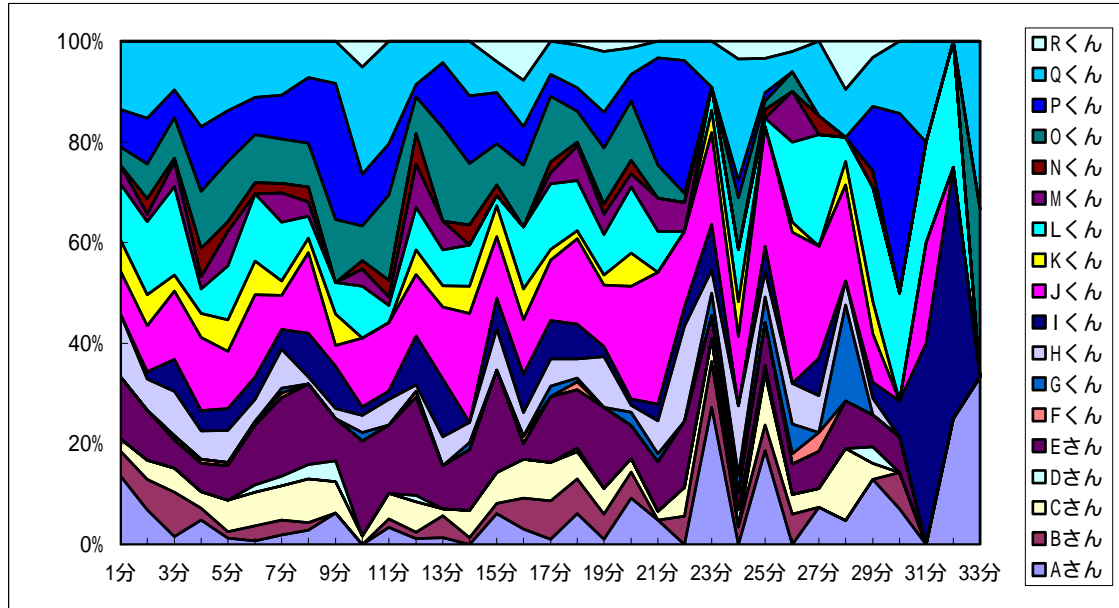
グラフ4：滑り台遊びの個人別回数の割合



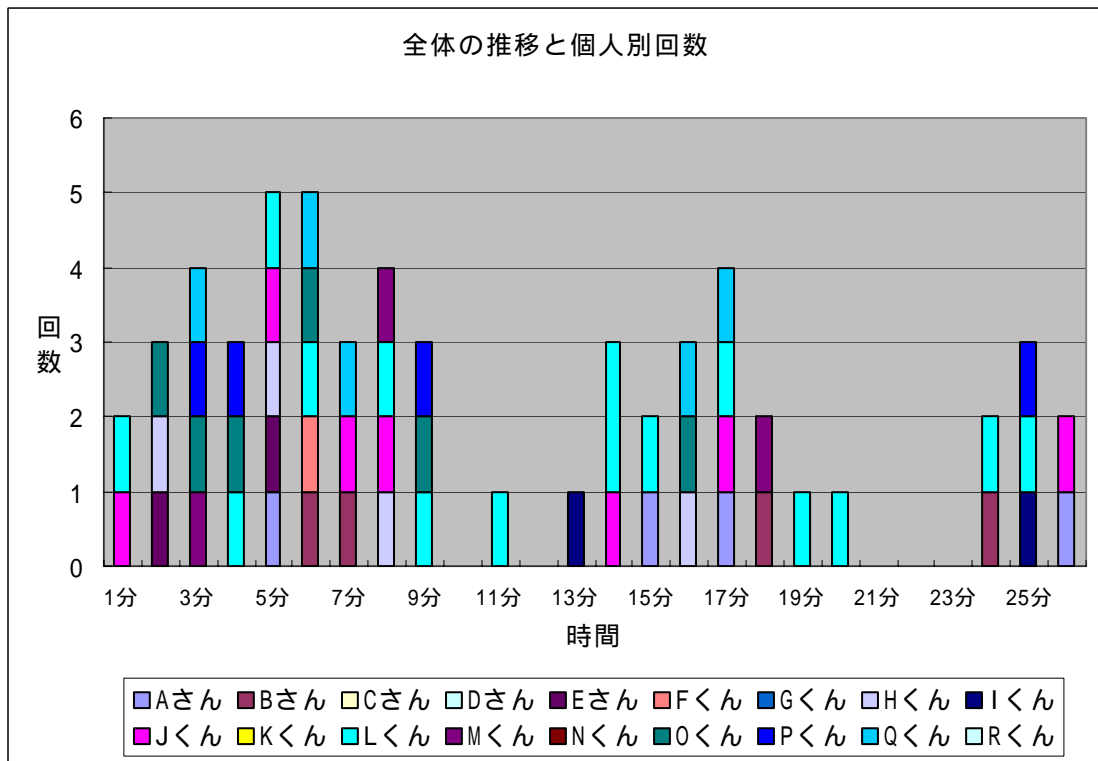
グラフ5：はしご遊びの個人別回数の割合の推移



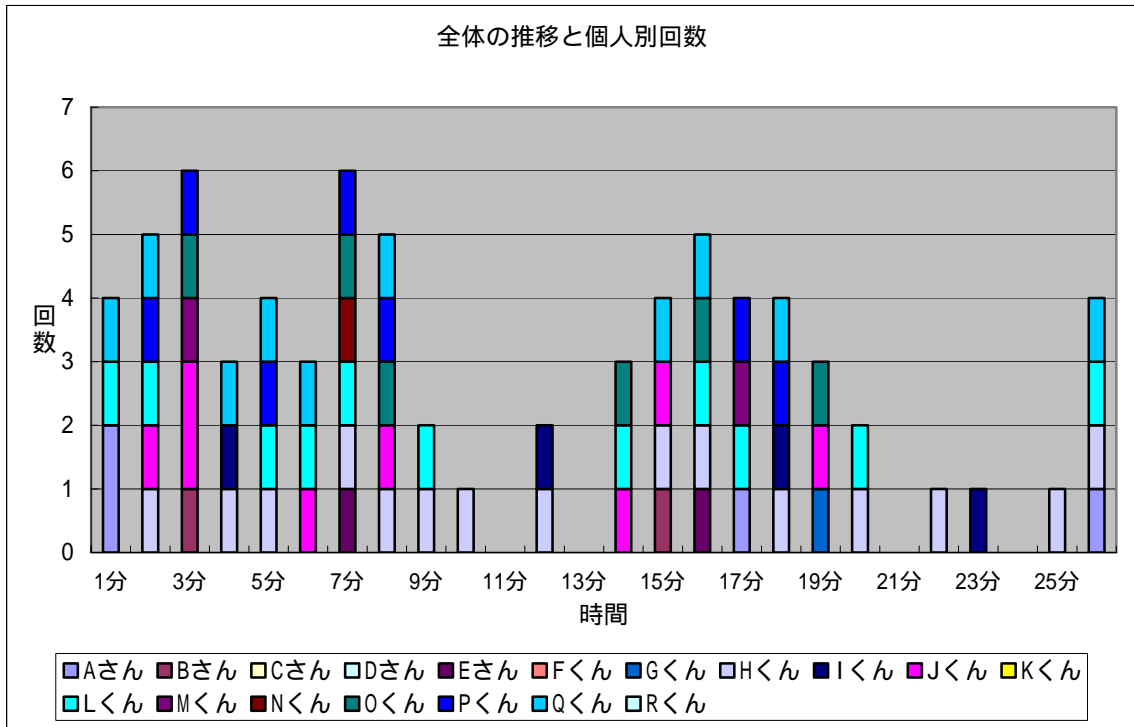
グラフ6：滑り台遊びの個人別回数の割合の推移



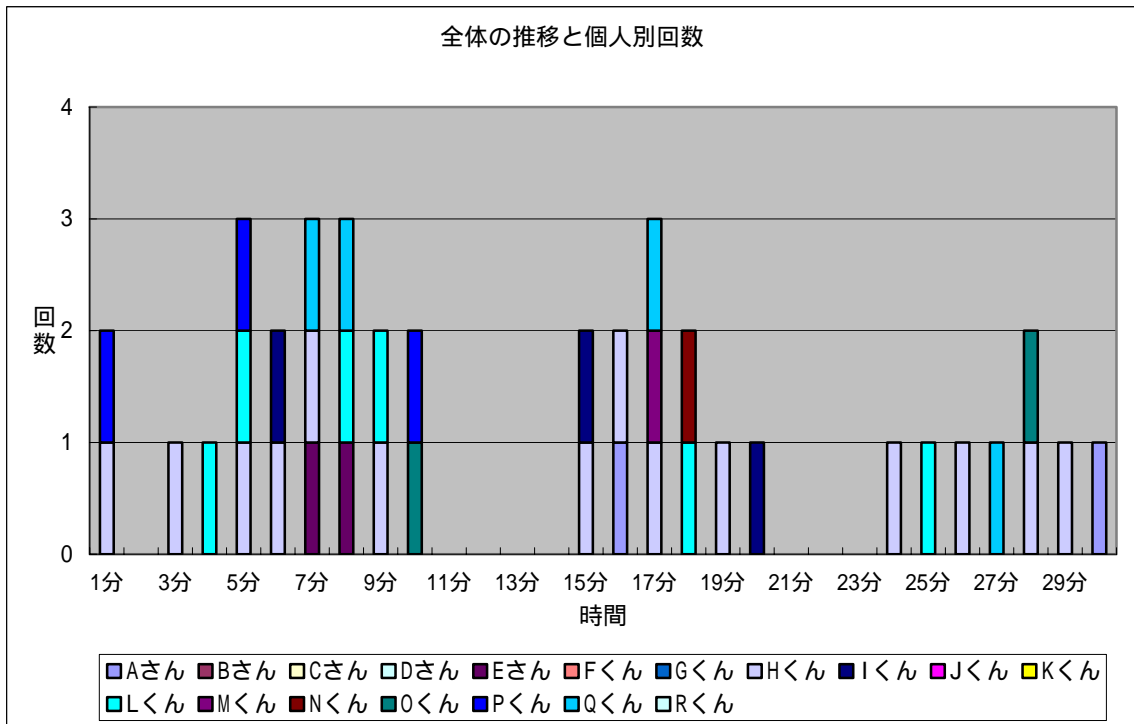
グラフ7：5/20 はしご遊びの全体の推移と個人別回数



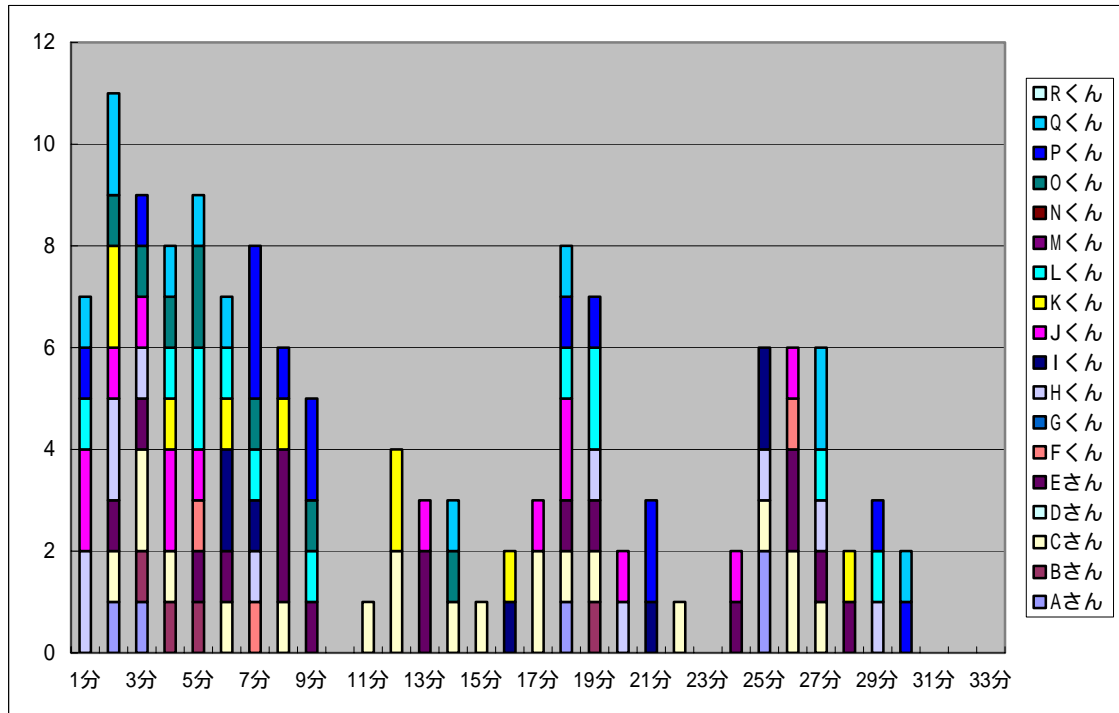
グラフ 8 : 6/11 はしご遊び 高いはしごの全体の推移と個人別回数



グラフ 9 : 6/11 はしご遊び 低いはしごの全体の推移と個人別回数



グラフ 10 : 5/29 滑り台遊びの全体の推移と個人別回数



サーキット一例

